

知的障がい支援学校における授業づくりのポイント（ナチュラルサポートの例）

① 教室・学習環境を確認する

例：机や椅子の位置や並び方、机上や収納状況、落ちているもの等の教室環境を確認する。
注目する方向の不必要な刺激物を除く等の学習環境を整える。

② 授業の取り組みに対する姿勢・態勢は整っているか確認する。

例：適切な姿勢ができていないか、順番を待っている子どもに配慮できているか確認する
指導者の指示や説明の声に、サブティーチャーや子どもは集中できているか確認する。

③ 授業の全体の流れ（めあて・内容）がイメージできるように視覚的に示す。

例：授業の全体の流れやめあてを貼るまたは書く。
今はどの活動をしているかわかるように矢印等（マグネット等）で明示する。

④ 全員が静かにするルールづくりと、静かになってから話し始める習慣をつける。

例：ハンドサイン、楽器、カード等を使って静かにするルールを習慣化する。
静かになったらすぐに褒めて評価し、静かな状況を実感できるようにする。

⑤ できるだけ視覚的に示すことができる教材・教具を活用する（視覚支援の充実）。

例：実物や写真・絵カード等を多用して、聴覚情報による記憶の負担を軽減する。
黒板の板書等を工夫する（板書の量・書く位置、区切り線をつける、色の配慮等）。

⑥ 今は、「聞くとき」「書くとき」「話すとき」を区別して情報を同時に提示しない。

例：教材を操作している（書いている）最中にことばで指示を出さない。教材の操作や書く活動等を一旦止めて、指導者に注目させてから話す（指示する）ようにする。

⑦ 授業における大切な指示や重要な内容のポイント等は繰り返し説明する。

例：大事なところは2回以上繰り返し伝える。
説明はシンプルにして、ポイントを明確に伝える等、わかりやすい説明を工夫する。
本時の授業における振り返り（子ども）とポイントの復唱（教員）は必ず行う。

⑧ 子どもの得意なところ（ストロングポイント）を活かし、ほめる場面を多くつくる。

例：子どもの得意な認知情報（視覚・聴覚・触覚等）をできるだけ活用する。
子どもの興味・関心に即した教材・教具を活用し、笑顔でほめる場面を多くつくる。
子どもが自己選択・自己決定できる場面を設定し、自己肯定感を高めていく。

⑨ 子どもの集中力と、子どもどうしの関わりを引き出す授業を工夫する。

例：授業の中で、リスタートの場面を設定する（気分転換や視点を変える工夫をする）。
授業の中で子どもどうしの関わりを引き出すような場面を設定する。
問題解決型（アクティブラーニング）、言語活動を誘発する学習課題を設定していく。

⑩ ティームティーチングの機能を高めていく（チームでの授業づくり）。

例：メインとサブティーチャーの役割分担や子どもの活かしたい力を共通理解しておく。
メインとサブティーチャーの役割交替ができよう双方から実践できるようにしていく。
サブティーチャーは授業の構成や進行を左右する重要な担い手であることを認識して
取り組むことが大切（授業のお手伝いではなく、プロのサブティーチャーをめざすこと）。